

# インクルーシブ社会への扉を開いた

## 国立競技場の取り組み

東洋大学名誉教授・国立競技場UDアドバイザー 高橋備平たかはし へい

国立競技場のUD整備がもたらしたもの

近年の公共施設建設でこれだけ大きな社会問題となり、なおかつこれからのユニバーサルデザイン(UD)の取り組みに影響を与えようとしている建設事業は見当たらない。国立競技場のUDは東京2020大会のテーマである多様性と調和の中から生まれたのであるが、もとはと言えばそのテーマは2006年の国連障害者の権利条約(CRPD)から始まったものだ。CRPDでは多様な人々の人権の尊重、公平性の確保を第一原則としている。東京大会の施設づくりもその考え方のもとに公平性のあるアクセシビリティの確保を目標としてきた。

東京大会の競技施設や宿泊施設、公共交通機関の整備はこうしてインクルーシブな社会環境を創

造することを目指した。その頂点に立ったのが国立競技場の取り組みである。無観客で終わった大会ではあったが、確実にレガシーが始まりつつある。

始まりはいつも雨

2012年11月、ラグビーワールドカップの主会場を目指した国立競技場改築の国際コンペが終了し、ザハ・ハデイドのデザイン案が選ばれた。この案についてのデザイン面での評価は省略するが、アクセシビリティの対応については2013年に公表された国際パラリンピック委員会(IPC)のアクセシビリティガイドを遵守していないことが2014年5月に公表された基本設計で明らかとなっ

た。結果、公表後まもなく国内の障害者団体から強い反発を受けることとなった。主管である日本スポーツ振興センター(JSC)は直ぐに改善の動きを見せたが、翌年7月には建設費の膨大な高騰を理由にザハ案が白紙撤回に追い込まれる。2015年9月、設計者・施工者の再公募が行われ、同年12月大成建設JVチームが設計施工事業者に選定された。振り返ると国立競技場のアクセシビリティはこの失敗があり、その後のUD

ワークシヨップの成功に繋がったといえる。筆者はザハ案の基本設計公表後に国立競技場UDアドバイザーに招聘され、ザハ案の改善から今日まで関わり続ける。

デザインビルド方式で実現したUD ワークシヨップの継続性

国立競技場のUDを成功裡に導いた理由は三つある。一つは世界最高のUDを目指すことを掲げたこと。二つ目はそのために、高齢者や障害者、子育て団体等との



写真1: 車いす使用者用客席 (1階)



写真2: 同伴利用可能な男女共用トイレ

ワークショップを行うことを業務要求水準に記述できたこと、そして三つ目にUDのワークショップの成果を絶えず施工現場につなげられるデザインビルド方式が採用されたことである。UDワークショップは基本設計、実施設計、施工段階を併せて実に21回開催され、画期的な取り組みとなった。

## 国立競技場で実現したUDの多様性

### (1) 車いす使用者用客席

無観客になってしまったが、パラ大会時にはIPCガイドを上回る1・3%となる車いす使用者用客席と同伴席を準備した。客席配置は車いす席と同伴者席を1ユニットとして孤立しないよう最低2ユニット以上を各階及び水平方向に分散して配置することとした(写真1)。同時に車いす席からフィールドを観戦する際には前列の人が立位になっても十分に視線を遮ることがないよう「サイトライイン」の確保を徹底した。国内初の国際水準の車いす使用者用客席

の誕生である。

### (2) 車いす使用者用トイレと男女共用トイレ

トイレは機能や設備を適宜配置する分散配置を実現した。トイレ面積の関係で1階外部コンコースの車いす使用者用トイレは多機能化した。基本は多様な利用者ニーズと必要な設備を組み合わせる機能分散を徹底した。また多様な同伴パターンや性的マイノリティに配慮しやや広めの男女共用便房を各ブロックごとに配置するなど多様性との調和をトイレ整備でも徹底的に追求した(写真2)。

### (3) カームダウンクールダウン

発達障害者団体から、大勢の人がいる競技場では、興奮しやすい状況が生じやすいので気持ち落ち着ける場所が欲しいとの要望があった。国内でもほとんど設計事例がないスペースの要望であったが、基本設計段階で予定されていた倉庫などの小部屋を活用することとした(写真3)。名称やピクトグラムも

初めてであったので、施工段階に入りエコモ財団に依頼し東京オリパラ大会関係者を一堂に集めたピクトグラム検討会で統一案を作成した。この統一案は2020年5月、男女共用トイレピクトグラムと一緒にJISに登録され何とか東大会に間に合った。

この他にも強い要望があった補助犬トイレ(写真4)、磁気ループ席、エレベーター内の緊急時聴覚障害者対応モニターなど沢山のUDを生み出した。

ワークショップの意義とこれからの期待

ワークショップの大きな意義は様々な当事者が一堂に会することによりお互いの経験や発言の真意を共有し、合意に向けた取り組みが必然になることである。そして設計者や施工者が必死になって改善策を提案する。容易なことも困難なことも含めてUDとは何かに直面し、多様なニーズをインクルーシブする経験を学ぶ。この経験を如何に拡大できるかが問われている。

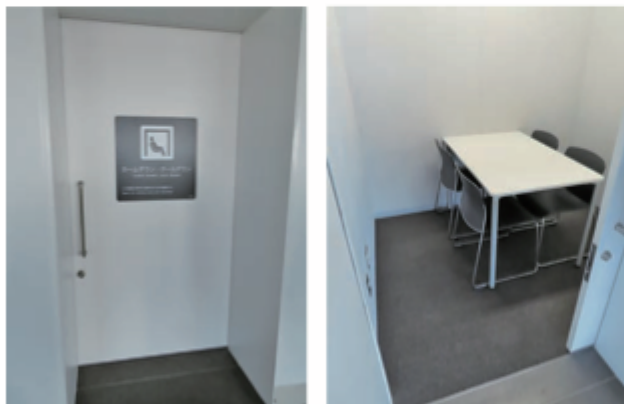


写真3: カームダウンクールダウンのスペース



写真4: 補助犬トイレ